付録Ⅶ平成二十六年度 鹿島神宮式年大祭奉納演武：鹿島神傳直心影流 / 鹿島神流

鹿島神流

平成二十六年九月一日に御船祭の前日に社殿前で行われた奉納演武会　鈴木久男、今淵正邦、沢里修次、伊藤瑞穂 撮影

国摩真人（クニナツノマヒト）から流れる**鹿嶋流**は五百年前に鹿島神宮の祝部（はふりべ）、松本備前守が**鹿島神流**と名付け、その後七代山田一風斎が**鹿島神傳直心影流**と定めて今日に至る。「抑々**鹿島神伝直心影流**は鹿島大明神即ち武甕槌神（タケミカヅチノ）の御精神を伝へ、直心即ち清明心を基とし一切は心の影即反映と感じ弥々心を磨き身を治むことを本旨とする流儀である。（中略）鹿島の神は責任心を精神として熱血精鋭、然かも冷静不動、終始一貫、根気強く冷静果断を以って本質とする御精神を基盤として伝へるのが直心影流である。この精神の発動面を神話に見れば、天孫降臨に先だち、天照大神が武甕槌神に重大使命を授けられお降しになり、大国主命と出雲の伊那佐（イナサ）の小浜に着いて談判せられた。この様子を神典に伝へて『浪の秀頭（ホガシラ）の割れ砕けて散る所に二つの霊剣を逆さに立て、其の尖端に足座（アグラ）をかかれて談判した』即ち『我れ若し責任を果すに当り心に動くことあらば、我と我身を真二つに斬るぞ』との堅い決心を以って剣の尖端に座るが如き必死三昧の態度を示す。武甕槌神の御精神の発露するところ、積極進取の開拓者の意気込を以て使命の完達を図り、私心を一刀両断して不動心を以て事に当り、進んで難局に身を以て当り、国の礎となって国威の進展を図られた。**常に男々しく勇ましく正しく強くある**と共に、時には断呼として不動心を発（ジン）し一気呵成に事を成しとげ、時には千変万化の事象に対処して適切なる処置をあやまらず、万宝を包蔵し玉収まって山光をつつみ和光同塵（ジン）の大度量を養ふ精神を剣道の型に折込んだのが法定として直心影流に伝統せられた。更に上半円は天地開闢に象り臍下丹田に気力を充実して天地一枚、神人合一の精神を体得することに勤め、百錬万鍛してこの精神の自得を期し、**単に道場にて打ち切る等の技を学ぶのみにあらずして日常生活に活用して、平生々活即剣道生活、剣道即人道と実生活にこの精神を活かす**様恩師一徳斎山田次朗吉先生に教へられて今日に及ぶ。私共はこの法定の勤行によって弥々この心を磨きこの精神を長養して、積極的勇壮活溌なる熱血と冷静不動の大度量を養ふことを期し、各々の職分を分担して責任の完遂に邁進し進んで国運の進展に貢献せんと期す」―― 鹿島神傳 第十七代 大西英隆百錬斎　『法定に就いて』より抜粋